

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 121 号

平成 24 年 5 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

「エデンのかけ橋 - モーク先生の教えと手紙」より(12)

第 3 部 バイブル・クラスのヨハネ福音書講義

解説 モーク先生のバイブル・クラス

澤 正雄

ミス・モークのバイブル・クラスは、いろいろな場所で、いろいろな形で開かれていた。ちょっと思いつくだけでも、小石川福音教会の日曜朝のバイブル・クラス、本所福音教会の日曜夜のバイブル・クラス、東京高師有朋館(寄宿舎)での木曜夜のバイブル・クラス等々。そして時代によっても多少の変化があった。

ここでは、小石川福音教会の日曜朝のバイブル・クラス、それも昭和の初期の姿を考えてみよう。バイブル・クラスは、朝 9 時に始まった。しかし、実際はもっと早く 7 時から始まっていた。バイブル・クラスは、本当は祈禱会で始まっていたからである。

この祈禱会では、アンドリュー・マーレーの祈りの小冊子を、モーク先生はお使いになった。

それを 1 章お読みになったあとで、私達にその朝特に祈ってほしいことを訴えられた。例えば、M 氏はここ 3 週間程来ない。是非彼のために祈ってほしい。Y は肺炎で入院している。彼のためにも祈

ってほしい。なおこのほかに、毎日曜日の朝、必ず祈るように言われたことは、今日の説教者のために祈ることであった。全員で祈り、最後にモーク先生がお祈りになった。

ほとんどが、下宿をしている学生なので、モーク先生はごく簡単な朝食を用意して下さった。それは食パンにバターとジャムをつけたものと、コーヒーであった。

それが済むと、当日の割当てが言い渡される。A氏とB氏は、M氏の下宿を訪ねてごらん下さい。C氏は今朝の司会。D氏は、通りに立っての案内。E氏は、座席までの案内。F氏とG氏は、今朝読む聖書の個所にプリントをはさむこと、等々。

モーク先生のバイブル・クラスの講義は天下一品であった。それは深い深い祈りによって準備され、伝えなければ災いであるとの、伝道の使命観に溢れた、喜びと確信の言葉であった。優しさの中にも、神の外何を恐れない気迫が感じられた。時に舌端火を吐くのがあった。

当時今のテープ・レコーダーがなかったのは、残念である。僅かに残っているのは、先に述べた、当日講義の荒筋を書いたプリントである。これはわれわれの英語の学力が十分でないので、何を習ったか忘れてはいけないという配慮から、手書きのガリ版刷りのものをお渡し下さったのである。言うなれば、広義の骨格でしかない。そこには血も肉もない。残念至極だけれども、先生の聖書講義は、骨組みでしかないプリントを通して、想像していただくより外に手はない。

幸いなことに、小西先生がプリントを多数保存しておられた。

以下その枚数を参考までに記すと、

マタイによる福音書	1
マルコによる福音書	4
ルカによる福音書	10
ヨハネによる福音書	30
使徒行伝	44

ローマ人への手紙	12
ピリピ人への手紙	1
出エジプト記	1
歴代志下	2
計	105 (枚)

ここに取り上げたのは、以上のうち、ヨハネによる福音書に関するもの5篇(注 エンカウンターでは2篇)である。105編の中のわずか5篇(2篇)であり、しかも講義の骨格でしかないけれども、なおこのプリントを通して、モーク先生が何を私達に教えようとなさったかは、十分にご想像いただけるものと思う。なおこの講義は、1952年から1953年にかけて行なわれたものである。長くご保管下さった、小西先生とご家族に心から、お礼を申し上げる次第である。

1 イエスとニコデモ 新生

ヨハネによる福音書 3・1 16

ローラ・モーク

1 新生

新生あるいは生まれ変わりは、私たちの霊的生活の第1段階です。私たちの心の中に新しい性質を創造するのはこの経験なのです。

新生は、単なる改革ではなくて、聖霊の創造的な業なのです。新生は必要です。なぜなら生まれたままの人は、神の国を見ることもできませんし、また神の国に入ることもできません。従って人が神の国に入り、本当に神の子となるには、この心の入れ替えに寄らなければなりません。この同じ経験は、回心とも、義認ともしばしば呼ばれています。新しく生まれるということは、救われる事なのです。これはキリスト教の信仰の基本的な狭義の一つです。この新生なしには、誰もキリスト者としての生活に入る事はできません。この新生の教えは、他の聖書のどの部分よりも、明確にそして完全に、ニコデモとキリストの会話の中に説明されています。そういう訳で、今日私たちが読もうとしている聖書の個所は、聖書全体の中で最も重要なところでは、

2 ニコデモ

ニコデモは、70人よりなるユダヤ人の議会、すなわちサンヒドリンの一員でした。ニコデモは、彼らの中で特に重要な人物でありました。イエスは彼に、「あなたはイスラエルの教師でありながら……」と申しておられます。ニコデモがイエスにお目にかかりたいという気持ちになったのは、第2章23節に言われている多くの、しかし特にこういうものだとは記されていないしるしを、見聞したからに違いありません。

ニコデモはイエスを「神から来られた教師」とであると信じていました。彼が夜ひそかにイエスの許に来たのは、夜の方がイエスと静

かに邪魔されることなく話す機会があるだろうと思ったからでしょう。お忙しい昼間では、群衆がイエスの周囲を取り囲んでいましたから、こんな話をニコデモがしようとしても、とうてい不可能だったことでしょう。ニコデモは熱心な質問者として参りました。

3 新生はある程度は神秘

イエスがニコデモに、「だれでも新しく生まれなければ、神の国を見る事は出来ない」とか「あなた方は新しく生まれなければならない」とか言われたときに、ニコデモのように高い教養があり人々に尊敬されている人物が、「どうして、そんなことがあり得ましょうか」と反論したとしても、そんなに驚くには当らないでしょう。新生は各人の人生に対する聖霊の働きだからです。洗礼を受ければ、異邦人もイスラエルの信仰すなわちイスラエルの民に生れ変わり、異邦人もイスラエルの民と共に、神の約束の世嗣となることができると、ユダヤ人は教えていました。しかしユダヤ人たちは、彼らには新生が必要なのだということは、夢にも考えてはいませんでした。そういう訳で、イエスのお答えは特にニコデモには驚きでした。イエスはここで、誰でも霊から生まれる必要があるということを教えておられるのです。

4 新生の根源

新生の源は、罪に汚れ、罪のために滅び行く人間に対する神の愛なのです。16節に私たちは次のような驚くべき御言を読みます。「神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」。私たちが自らを顧み自分の姿を見つめるとき、神様がお望みになっている状態にどんなに遠く及ばないかを感じないではおられません。しかし神様は私たちを愛して下さる余り、「ご自身の御子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡された」。このようにして神は、私たちが生まれ変わり、私たちの性質が変えられてし

もう道を備えて下さったのです。

5 新生の働きすなわち方法

新生が成就する方法は、キリストの十字架なのです。そのことは14節、15節で明らかです。「そして、ちょうどモーセが荒野でへびを上げたように、人の子もまた上げられなければならない。それは彼を信じる者が、すべて永遠の命を得るためである」。キリストがカルバリの十字架について下さったので、わたしたちは新しく生まれることができるようになったのです。モーセとへびのことは、ユダヤ人には周知のことでした。荒野で幕屋に住んでおりました時、多くのイスラエル人が、猛烈な毒へびにかまれて死んで行きました。神はモーセに青銅の蛇を造り、それをさおの上に掛けるように命じられました。そのへびを仰いで見たすべての人たちには、生命と健康が与えられました。同じようにキリストも十字架の上にあげられたのです。私たちはキリストを信じることによって仰ぎ見ます。すると仰ぎ見ることによって永遠の死から救われて、永遠の命が与えられるのです。

6 人間の果たす役割

個人の救いすなわち新生には、人間の側にもなすべき役割があります。それはカルバリの丘で苦しんで下さったキリストを信じることなのです。そのように信じるのが、この15節、16節にもある通り、新生の条件として示されているのです。信仰を持てば、神の下された方、御子キリストを喜んで受け入れるのです。信仰はキリストが十字架の上で死んでくださったことを、受け入れます。キリストは私の罪のために死んで下さったのです。私たちはそれを受けただけなのです。

7 永遠の生命

新しく生まれ変わる時、永遠の生命が与えられます。この幸いな経験をするとき、私たちはイエス・キリストにある新しい人間になるのです。「古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったの

である。(コリント人への第2の手紙5・17)

2 イエスとサマリヤの女

ヨハネによる福音書 4.1 - 26

1 ユダヤを去って

イエスは暫くの時をユダヤの田舎で過ごされ、多くの信者が出来ていました。実はこの人たちはイエスからではなく、弟子たちからバプテスマを受けていたのです。しかしパリサイ人たちが妨害しようとしたことと、イエスの奇跡が生んだ神の国に関する間違っただけのため、ユダヤを去って、妨害を受けずに伝道の仕事を続けられるガリラヤに、行こうとなさいました。今日の聖書の個所の出来事は、イエスのガリラヤへの途上で起こったことです。

2 サマリヤはユダヤとガリラヤの間

サマリヤはユダヤとガリラヤの間にあつたのですが、ユダヤ人たちはしばしばこの道を避け、ヨルダン川を渡りペレヤを通過して、わざわざ回り道をしていました。それは、彼らの偶像礼拝とエホバの礼拝とを結合して行なつてはいましたが、もともとユダヤ人ではないサマリヤ人を軽蔑して、彼らと接触するのを避けたからです。そういう訳でサマリヤ人は、モーセの律法に対してこれを守る熱意は、ある程度はあつたのですが、正統的な礼拝とは言えませんでした。しかしイエスは近道を行なさいました。ある目的のためにサマリヤを通る道をお選びになりました。

3 どうしてもサマリヤを

4節には「イエスはサマリヤを通過しなければならなかつた」と記されています。イエスがこの道をお選びになった目的は、井戸のそばにいたサマリヤの女の相手を作らねばならぬためであつたことは間違いないところでしょう。そしてこの女を導いてイエスに対して強い信仰を持つようにさせ、彼女の心のかわきをいやすことを願われ、同時に人間に対する神の愛の啓示はユダヤ人だけに与えられたものでは

ないことを示そうとなさったのです。すなわち国籍に関係なく、あらゆる人々の魂を熱心に追及してそのかわきをいやそうとなさっておられたことを実際にお示しになろうとなさったのです。

4 およそ昼頃

ヤコブの井戸としてよく知られていた有名な井戸のある、スカルの町にイエスが旅の疲れを覚えながら、お着きになったのはおよそ昼の12時頃でありました。この井戸には、周囲の各地から水をくみに、沢山の人々がやって参りました。この場面ではイエスの真の人間性を垣間見る思いがいたします。イエスは井戸の縁石に腰かけて休んでおられました。弟子たちは一方昼食の食物を買いに、町に出ておりました。

5 サマリヤの女水くみに

イエスが井戸のそばにすわっておられた時、このサマリヤの女が水をくみにきました。水をくむのは婦人の仕事でした。イエスは、「水を飲ませて下さい」と話しかけて、この女と話す口火をお切りになりました。彼女に近づくのには、うまい方法でした。私たちの救い主イエスは永遠の真理を聴衆に教えるために、どこにでもある、身の回りの日常の物をよくお使いになりました。そしてここでもこのやり方で、この女に彼女の必要としているものが何であるかを見せて下さいました。当然のことですが、イエスが「ユダヤ人でありながら」自分に話しかけ、飲ませてほしいと頼まれたのには、びっくり致しました。そこで女は9節のように答えました。「どうしてサマリヤの女の私に、飲ませてくれとおっしゃるのですか」。

6 女の関心が喚起される

そこでその女の関心が喚起されました。するとイエスは忍耐深く女を「救いの井戸」に導いて下さいました。女の質問にはお答えにならないで、イエスは次のように言われました。「もしあなたが神の賜物のことを知り……」。

この賜物、すなわちこの生ける水は、もっと深くて大きいかわき、魂のかわきを永遠にいやすことのできる、靈的生活の水なのです。女はじきに熱心に質問をし始めました。彼女はニコデモよりもっと熱心でした。救い主イエスがおっしゃったのがどういう意味かは、ぼんやりとしか分かっていませんでしたけれども、何か素晴らしい賜物を下さるのだということは悟り始めていました。そしてそれを下さるようにと求めました。しかしその賜物は靈的なものだとは悟る前に、靈的に何かを必要としているという感覚に目覚めさせられなければなりませんでした。

これはこの女に限らず、すべての人について言えることです。キリストが下さる救いは、自由で、魂を満足させ、永遠です。すべての人の魂は自分で気がついていてよりも、はるかにかわいているのです。しかし自分で自分の必要を認めた時に始めて、「救いの井戸から水をくむ」ことができるようになり、心の中に永遠の命に至る水がわきあがるあの井戸を（14節）を持つことができるのです。

7 次の段階は女が自分の罪を悟ること

そこで次の段階はこの女に、自分の罪を悟らせることでした。そしてそれを、すべての魂をとらえる人たちのうちで、最も賢いイエスが、17, 18節で実行しておられます。一瞬のうちにイエスは、彼女が自分で知っているよりももっとよく、自分のことは何でもご存じだと、彼女にそう感じさせてしまいます。

そして徐々に彼女はこのお方は普通のお方ではなくて、あの約束された救い主なのだと分かるように導かれていきます。イエスはまた形式的な礼拝は、真の礼拝の精神と結合しているというだけでは、何の役にも立たないことを明確にしておられます。

8 神は靈

「神は靈であるから、礼拝する者も、靈とまこととをもって礼拝すべきである」。心の誠が必要であるばかりでなく、私たちは神について正しい考えを持つ必要があります。このような靈的な礼拝は、ある特定の場所に限られるものではありません。神の真の子供にとつ

ては、あらゆる場所が聖であり、どういう地点でも、祈りと礼拝の場所となり得るのです。